

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 富樫 孝志

本論文は、石器群の構造変動と居住形態という最新の研究視点に基づいて、後期旧石器時代に静岡県磐田原台地を開発した人類集団の行動軌跡の詳細を明らかにした完成度の高い実証性に富む意欲的な研究である。従来の研究では、石器を文化要素として捉え、文化を単位として時空間に配列する方法がもっぱら採用されてきたが、むしろ石器は生活の道具であると理解し、生活活動(行動)の構造変動から時間的推移と行動システムの変化を読み取ろうとする本論文の研究方法は、長期にわたる丹念な基礎的資料分析に裏打ちされて、きわめて説得力のある内容に結実している。

本論文は5章からなり、第1・2章では、研究の目的と問題の所在について、分析方法に関する諸概念の整理、氷期の更新世(=後期旧石器時代)における磐田原台地の古地形・動植物相・石器石材といった環境条件、これまでの調査研究を規定してきた既往調査研究例の批判的再検討等を通して整理し、第3章では、行動論的視座から、時間単位としての石器群の定義とその構造変動(時間的変遷)を新しく提案した。これまでの編年は、集団系統の異なる文化の変遷として描かれてきたが、その虚構性を指摘した上で、生活行動システムの変化としての構造変動の重要性と意義を示すことに成功している。

本論文の中心となる第4章では、磐田原台地に展開した後期旧石器集団の資源開発行動を、具体的な遺跡出土石器資料の製作・運用技術分析に基づいて丁寧に説明しており、その周到な論理展開と合わせて、先史考古学的研究として秀逸であると評価できよう。さらに、磐田原台地を取り巻く周辺地域への目配りも欠かしておらず、石器型式論だけではなく、居住領域や行動システムといった社会的側面にまで止揚することによって、旧石器考古学における地域研究のひとつのモデルを提出したと言える。なお第5章は、既述をまとめた結論となっている。

静岡県西部に所在する磐田原台地は、南北11km、東西5km程度の小規模な独立台地であり、これまで全域がよく調査されているにもかかわらず、実態が不明瞭であった。申請者は、担当者として長期にわたり当該地域の調査に従事してきたという経験も加味し、研究視点の転換と徹底的な基礎資料の掘り起こし及び現地踏査によって、全く新しい旧石器時代像を描いたと評価できる。惜しむらくは、先史人が対象とした開発資源の実態(対象等)に関する言及に乏しい点が挙げられるのだが、それは日本列島の旧石器研究全体に当てはまる課題でもあり、本論文の意義を損なうほどのものではない。

以上より、本委員会は博士(文学)の学位を授与するにふさわしいと認めるものである。